

『浮世風呂』に見る「大和詞」について ——『婦人養草』の「和言」との関係から——

長崎靖子

キーワード・大和詞 女訓書 『婦人養草』 和言 日葡辞書

要旨

式亭三馬著『なふるもよみうたしづくし 艶訓歌字盡』(文化二年)冒頭の「一部の大和意」には、梅塙散人著の女訓書『婦人養草』の書名が見られる。この『婦人養草』巻之五には「女中のつかふ詞ことばを部をわかちこゝにのべ侍る」きるい「着類并諸道具しょうぐの和言やまじことばの事」の題の後後に一二項目一二四語の大和詞が掲出されている。三馬はこれを『浮世風呂』に使用される大和詞の参考とした可能性がある。そこで、本稿では『婦人養草』の「和言」と『浮世風呂』の「大和詞」の比較を行い、『婦人養草』に掲出された「和言」が『浮世風呂』の中で、二十二語見られるという結果を得た。『浮世風呂』には『婦人養草』に掲出されていない大和詞も見られるため、『日葡辞書』の女性語との比較も行い、さらに九語の使用を確認した。

また『浮世風呂』には小笠原流の諸礼書に関する記載もある。

る。諸礼書の中には女訓書が含まれるものがあり、この点からも、三馬の大和詞の描写に女訓書が関係していたことが予想される。

一 はじめに

式亭三馬の著作『浮世風呂』には、大和詞(1)が使用される場面がある。三馬は大和詞の知識をどのようにして得たのであろうか。本稿では三馬著作にみる大和詞に影響した可能性として、女訓書『婦人養草』の「和言」を観察する。

二 武家屋敷への奉公

『浮世風呂』の中では、様々な場面に大和詞が使用されているが、特に知られるのは、お屋敷奉公にあこがれるおむす

が、宿下がりをしたおさめとそのお付きの女中お初にお屋敷の暮らしを尋ねる場面である。

江戸時代、上層町人の娘が武家屋敷へ奉公することは、より良い嫁ぎ先を見つける付加価値を持っていた。そのため、富裕な町人は娘たちに踊りや三味線、琴、太鼓、書道等の芸事を学ばせた。氏家幹人の「日常性の中の武士文化」(一九八五)では、当時の状況を次のように述べている。

宝暦六年(一七五六)刊の『風俗七遊談』は、最近の風潮として、「浪人町人又は裏や住居の者、目鼻立ちよく洪抜けたる娘あれば、幼少より摺磨て掌上の玉のことく育て、何都坊が弟子となして三味線歌浄瑠璃を習はせ……十四五歳にもなれば、肝入の手にかけて……」と述べているし、戯作調の筆で当世をうがった平賀源内の『風流志道軒伝』(宝暦一三年(一七六三)刊)にも、「其時代に流行るものは、坊主、金持ち、女の子、三弦、じやうるり、たいこもちの類」の言葉を見つけたことがでさる。著された正確な年次が詳らかでないが、『寛保江戸風俗志』(寛保・延享年間は一七四一〜四八)が、延享の頃までは踊を稽古するのは鳶職や芝居関係者の娘に限られていたのに、「今はおどりおどらぬ者は武家町共」なく、富裕な町人でも娘を大名屋敷に奉公させるために三味線、踊を習わせるようになったといっているのも、

同様の現象に注目したものといえるだろう。娘―踊・三味線(芸事)―武家屋敷奉公という連鎖は、植崎九八郎が田沼政治を批判する上書を提出した天明七年(一七八七)には、「当時之上に立候程、尚女奉公人を召抱候二者、三味線・小唄、踊りなど心懸ケ不申候者ハ召抱不申候様にならはせに成候故、娘さえ持候へ者、大かた小唄、三味線習ハせ候事ニ相成候(『植崎九八郎上書』)といわれるほど、まぎれもない風潮となっている。

三五九―三六〇頁

『浮世風呂』でも幼いころから様々な稽古に励むお角とお丸という少女の会話が描写される。

角 まアお聴な。朝むつくり起ると手習のお師さんへ行てお座を出して来て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね。内へ歸つて朝飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて、お八ツに下ツつて湯へ行て參ると、直にお琴の御師匠さんへ行て、夫から歸つて三味線や踊のおさらひさ。

(中略)

其内に、ちイツとはかりあすんでね。日が暮ると又琴のおさらひさ。夫だからさつぱり遊ぶ隙がないから、否で〜ならないはな。(角↓丸)

三編卷之上

また、子供のころから娘を武家屋敷に奉公に出している上層町人の女性の会話も見られる。

いぬ (略) おいくつからお上なさいましたへ (いぬ ↓ きぢ)

きぢ ハイ、六ツの秋御奉公に上ました (きぢ ↓ いぬ)

いぬ へエ。よく思ひ切てネエ (いぬ ↓ きぢ)

きぢ ハイサ。乳母を付て出しましたから、只今までも御奉公が勤りますが、最う早、わが儘ものでこまりま

す。(きぢ ↓ いぬ)

二編卷之上

このように江戸時代の上層町人の間では、良い縁談を得るために娘を武家屋敷に奉公させることが一般的であった。

三 『浮世風呂』に見る大和詞

この武家屋敷の中で使用されていたのが、大和詞(注1参照)である。『浮世風呂』の中では、先にあげたおさめ、お初、おむすの会話にその様子が窺われる。この中には、おむすもじ言葉の間違って使用し、これをおさめがたしなめる描写が見られる(傍線は筆者による。波線は間違った用法)。

おむす 私は名代のおてんばだ物を。ハイおちやつぴいと おてんばをネ。一人で脊負てをります。夫だから

ネ、感心なおしやもじだよ。(むす ↓ さめ、はつ)

おさめ フヤ、おしやもじとは杓子の事でございますよ
ヲホ、、、(さめ ↓ むす)

おむす おさめさん、ほんにかへ。私は又おしやべりの事

かと思ひました。鮓をすもじ、肴をさもじとお云

ひだから、おしやべりもおしやもじでよいがネエ

(むす ↓ さめ、はつ)

おはつ いかん事でもおまへさんヲホ、、、(はつ ↓ むす)

おさめ やがてお屋敷へお上だとわかりますのさ(さめ ↓ むす)

むす)

おはつ さやうさネエ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと、

夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ(は

つ ↓ むす)

三編卷之下

二重傍線の「大和詞」は、日本古典文学大系本では「上品な言葉の意であろう」、新日本古典文学大系本では「女房詞の異称」と解釈されている。松井利彦(二〇一四)の「第二章 女中ことばの名称」ではこの『浮世風呂』の場面と共に、『四十八癖』の描写を取り上げ、次のように述べている。

お屋敷のなかで女性が世間一般と違う、物の「あだ名」を使い、「あだ名のねへ物へは、やつたらむしやうにおの字」と「もじ」を付けるのが習わしで、そのような制

度の下で武家屋敷の女性が生活していると、三馬が理解していても、女中ことばが使用される、その場に居合わせ直接に聞く機会がなかったのではないか。『四十八癖』や『浮世風呂』での女中ことばの描写は、女性書に記載されている女中ことば集に三馬が刺激されて創作意欲を燃やした結果であるかもしれない。

(二五五頁)

松井はここで、武家屋敷で女性が使用する特別な言葉があることを三馬が知っていたこと、そして三馬が、その言葉(大和詞 松井(二〇一四)では「女中ことば」)の知識を女訓書から得ていたのではないかという可能性を示唆している。

三馬が実際に日常の言葉遣いを観察し、そこから大和詞を採取したかどうかの是非はまた別稿にて検証するとして、確かに三馬は女性向けの教養書を著作に反映した節がある。『浮世風呂』二編巻之下には、おしつとおかさが筈の話をする会話が見られ、挿図に筈が描かれている。この図に關し、三馬

は奥田松柏軒の『女用訓蒙図彙』(貞享四年)から引いたことを注記している。他に、三馬が女訓書の大和詞を参考にした可能性を示す証として、三馬著の『なぶるもよらしたじやくし 鵬訓歌字盡』(文化二年)があげられる。『鵬訓歌字盡』冒頭の「一部の大意」には、「明の李卓吾が山中一夕話を見るに桐城女の條に至り。ひとつの趣向をたくむに我邦梅塙散人が婦人やしなひ艸に見え

し。伊勢谷日向の物語に彷彿たり。(傍線筆者)」という記述がある。梅塙散人(し)著の『婦人養草』(自序貞享三年 元禄二年刊)巻之四の十五には「伊勢や日向の物語といふ事」の話があり、三馬はこの内容を種に『鵬訓歌字盡』を書いたとする。

『婦人養草』はいわゆる女性の教育書である。田中ちた子・田中初夫編の『家政学文献集成続編 江戸IV』(渡辺書店 一九七二)の解説では、序の内容を次のようにまとめている。

本書は女子が幼時よりやがて婚期に達し、家庭を持ち、老いゆくまでの間の生活の万般に対して教えるものであつて、その為に和漢の貞女義婦の説話を書いたものであるといふのである。

(解説 三頁)

この『婦人養草』巻之五には「女中のつかふ詞を部をわかちこゝのべ侍る」と記され、「きるい 着類并諸道具の和言の事」の題の後に一二一項目一二四語の大和詞が掲出されている。(3)もちろん、『婦人養草』の書名が三馬の著作に見られるというだけで、即三馬が『婦人養草』の「和言」を著作の大和詞に利用したということにはならないだろう。しかし、三馬が『浮世風呂』の中で『女用訓蒙図彙』を利用していたところから察するに、『婦人養草』の「和言」が著作に利用された可能性は高いと思われる。また、三馬がお初にお屋敷で

使用する言葉を「大和詞（やまとことば）」と言わせているところにも、「和言（やまとことば）」との接点が窺われる。

そこで、本稿では『浮世風呂』の大和詞が『婦人養草』に掲出された「和言」と、どの程度の重なりが見られるか、大和詞を使用する人物がどのような階層かも含め観察する。大和詞を使用する人物の階層については、小松寿雄（二九八七、一九九九）を参考に⁽⁶⁾する。

四 『浮世風呂』と『婦人養草』の大和詞

『浮世風呂』の中で最も大和詞が使用される場面としてよく知られるのは、先にあげた三編巻之下のおさめ、お初、おむすの会話の中である。まず、この会話場面の中に見る大和詞を抽出し、『婦人養草』の「和言」と比較する。『婦人養草』の記述は後に〈養〉と表記する（用例の傍線は筆者が記した）。

・かみあらふは おぐしすますと〈養〉

01初 あのネ、おむすさんのお髪は、今日のはまことに恰好がよいぢやアございせんかねへ（はつ↓さめ）

02おさめ さうさ、ホンニおむすさんのお髪はどなたがお結だエ（さめ↓はつ）

・錢百は をあし一すじと〈養〉

・米は うちまきと〈養〉

03、04初 ホンニまことに感心だネエ。私どもは百で調た米を一度にいたぐいても此眞似は出来ません（はつ↓むす）

・しゃくしは しゃもじと〈養〉

05おさめ ヤヤ、おしやもじとは杓子の事でございませよ。ヲホ、、、、（さめ↓むす）

・すしは すもじと〈養〉

06むす 鮮をすもじ。肴をさもじとお云ひだから、おしやべりもおしやもじでよいがネエ（むす↓さめ）

・味噌はむしと〈養〉

07初 中白とは四方の味噌でございませよ（はつ↓むす）

・ゆぐは ゆもじと〈養〉

08むす 此湯もじがあんまり熱もじだから、つい焼痕もじ（むす↓さめ、はつ）

・水は おひやと

09初 チツト水をうめませうか（はつ↓むす）

三編卷之下

以上、この場面には『婦人養草』の「和言」に掲出される八語の大和詞が見られる（08の「湯もじ」の用例は「湯」のことと考えられるが例として数えた）。三人の階層は、おさめ、おむすが上層とされる。お初は下女で下層とされるが、小松（一九八七）では、おさめのお付きで武家屋敷につとめているので「お屋敷言葉を使う」とする。

この場面に見られる大和詞のうち、「おぐし」「おむし」「ゆもじ」「おひや」は別の場面にも使用されている。

・「おぐし」

10 ● コウ、おめへん所のおかみさんもお髪はお上手だの

11 ● (■) なんの、しやらツくせへ。お髪だの、へつたくれのと、遊せ詞は見ツとむねへ。ひらつたく髪と云な

ナ。(●↓■)

二編卷之下

てう」の下女。

※●はお丸という下女、■はそのともだちの「ふとつ

10、11は、商家で働く下女同士の話で、下女の一人が「お髪」と言ったことを咎め、「湯へでも来た時は持前の詞をつかはねへじやア、気が竭らアナ」と嘆いている場面である。両方とも下層とされる。

・「おむし」

12 さる ウンニヤ。さうしてはゐられねへ。今に九ツが鳴るだらう。早く歸つてお節の支度をせにやアならねへ。おめへん所は味噌の雑糞か(さる↓べか)

三編卷之上

12のさるとべかは、商家に奉公する下女で下層とされる。正月の雑煮の味付けについて話をしている。

・「ゆもじ」

13 (略) 權兵衛袂褌から八兵衛が羽二重に移り、田婢の湯具から令室の絹布へも移る。(略)

「浮世風呂大意」

14 ▲ 私どもの嫁が湯具を縮緬の中幅を二布にいたして、

(中略)

貴さまはあまり無寝な人だト。女のゆもじといふ物はしろもめんふたの白木綿二布に規した物で、膝から下へ下る物ではない。

(中略)

長ゆもじといふ物は下鄙た人のする業でござるツサ。女郎ですら好葉は昔の風を癢す。万事長しやかだから長ゆもじなど、いふ事はないといふ事だ。早く止さつしやいと申て異見いたしました、それをも知り

つ、りんの馬鹿めが、幾布にいたした事やら。木綿の長ゆもじをちやんとしめましたはな（▲↓●）

三編卷之上

※●は「人がらのよきかみさま」▲は「六十ちかきばあさま」

13は『浮世風呂』の「大意」にみる用例、14は「六十ちかきばあさま」が「人がらのよきかみさま（金溜屋内儀）」に自分の嫁の湯具が長く下品であると嘆いている場面である。両者は中層上位とされる。

・「おひや」

15よめ マア、すこしお待遊ばせ。おまへさんにはチトおあつうございませう。弥壽か。どうぞの、爰へ水を少しお呉れ（嫁↓姑、やす）

二編卷之下

15は屋敷奉公を終え、上層町人のもとへ嫁に入った女性が、姑をつれて湯屋に来た場面である。下女の弥壽に湯をうめる水を頼んでいる。嫁、姑は上層とされる。弥壽は下層とされるが、先にあげたお初と同様部屋がたつとめをしており、お屋敷言葉を話している。

以上に取り上げた語の他にも、『婦人養草』「和言」の中には、『浮世風呂』に使用される語が見られる。

・小袖は 呉服といふ（養）

16 お川 呉服屋へは夫婦連で見立にいくか（川↓山）

三編卷之下

16はお川とお山が隣家の夫婦の様子を話している場面である。お川とお山は下層あるいは中の下とされる。

・紅粉は おいろと（養）

17 ● トレ手拭を見せや。紅を付て、化粧をして、へん、い、業晒だぜへ。（●↓▲）

前編卷之上

※●は「はたちあまりのをとこ」、▲は「二十二三の男」。

18 おかべ あれも大かたはさうだらうが、昔からする人が有から、あの方はまアゆるしもせうよ。しかし、目のふちへ紅をつけた人は老て目のふちが黒くなるツサ（かべ↓いへ）。

三編卷之下

17は遊郭から風呂へやってきた男を別の男性がからかっている場面である。男性であるが、「化粧」を「けへく」というなど、遊郭の女性が使う言葉を使用している。階層は下層とされる。18はおかべとおいえという若い女性が、流行の髪

形や化粧について話をしている場面である。両者は中層下位とされる。

ツ、も寐酒をのませるしのと(とり↓さる)
二編卷之上

・ねる事は おしづまると(養)

19さる (略) そのあげくは寒からぶつかけを食てへのと、さんざつばらあばれ食をしてお寐ると高軒だ。(さる↓とり)

三編卷之上

19はさるが息子の嫁の悪口を言う場面である。小松(二九八七)では、「さる・とりは棒手振りの母及び職人の母で、下層であろう」と述べている。

・もちは かちんとまたあも也(養)
22けり子 此間ネ、あまりいやしい題でござりますが、おかしんをあべ川にいたして、去る所でいたゞきまし
たから、とりあへず一首致ました(けり子↓かも子)
三編卷之下

・むまい事は いしいと(養)

20した いかな事でも、あれほどおいしい物をや。(した↓にが)

二編卷之下

20は口の悪いお舌がお舌に漬物をもらったお礼を言っている場面である。両者は共に下層とされる。

23金 おつかアが待てゐるだらうぞ。お芋か、餅か、何でも能子になつた御褒美に待くして居るだらう。
前編卷之上

・一盃は 一つと(養)

21とり (略) 毎日商から歸りにはの。何かしら竹の皮へ買て來ての。サア、か、さん、一ツあがれと、一合

24おたこ 坊は聞訳が能から御褒美をやりませう。餅がよろ。薄皮か、お焼芋か(たこ↓小兎)
三編卷之下

22は文学少女けり子とかも子の会話で、けり子が餅を題に歌を作った話をしている。共に上層とされる。23は金兵衛が子

供をあやしなから風呂に入れていた場面である。金兵衛は中層あたりとされる。24はたこという女性が子供を風呂に入れていた場面、中層上位とされる。23、24とも「餅（あんも）」という言葉を使っているが、これはあるいは幼児に使用しているのが幼児語とも考えられる。

• てんがくは おでんと（養）

25 ● 大福餅から、ゆで鶏卵。お芋のお田。なんでも通るものをかうと云出して騒立るだ。（●↓▲）

三編卷之下

※ ●も▲も六十歳近い女性

25は自分の息子の不出来を同年輩の女性に嘆いている場面で、両者は中層あるいは中層下位とされる。

• まめのこは きなこと（養）

26 けり子 うまじものあべ川もちはあさもよしきな粉まぶして昼食ふもよし

三編卷之下

26は、22のけり子が餅を題に作った歌である。

• しゃうゆふは おしたしと（養）

27 かみ 第一が薄したちで吸物じやさかい、酒の下酒になと

せうものなら、いつかう能じや。（かみ↓山）

二編卷之上

28 べか うんにや、やつぱり醤油のお雑煮さ（べか↓さる）

29 さる そりやア奇特だのう。おらん所も醤油さ（さる↓べか）

三編卷之上

27は上方の女性の用例で、鼈料理の味付けについて話している。28、29は12と同じ人物で、正月の雑煮の味付けが「醤油（したじ）」であると話す場面である。

• なすびは なすと（養）

30 けち そりや氣のどくちや。おまへに損かけちや、つらい場ぢやナ。何ぞ買て入合せをせうかい。此茄子はな

んぼする（けち兵衛↓商人）

31 商 焚茄子もおかしい（商人↓けち兵衛）

四編卷之中

30、31は上方下りのけち兵衛（のちに「けち助」になっている）が青物売りの商人と話す場面で、けち兵衛が茄子の値段を値切っている。上方のけち兵衛だけでなく商人も「なす」を使用している。

・かうの物はかうくと(養)

32した ほんに今朝ほどはお珍らしいものがありがたう。い

つうでもおもらひ申せばアつかり居やすネ。そして

あのお香くのお塩梅の能さ。ありやアもし、どん

なにお漬なさるか、とんだお上手だ(した↓にが)

前編卷之下

32は20と同じ場面で、お舌は漬物に「お香く」という大和

詞を使用している。

・芋葉とあつきの入しるを ふしのおつけと(養)

・すいき汁は 露のおつけと(養)

33松 鯉節のはいる汁は夷講と生辰ばかり。三度の飯の外に

食ふものは、冷飯を干た糲の塩いり(松右工門↓八兵

へ)

前編卷之上

34(煮)

汁が銀杏大根に焼豆腐の塞目、お平はお定りの芋

胡蘿蔔、牛房大根、田作といふ所を(煮↓)▲

三編卷之下

35てんつるてんの古ゆかたも余程育つたと見えて、肩縫上を

おろした跡が眞新しくわかり、襟かたから胸いちめん汁の

か、つた古跡べつたり。

四編卷之上

33は松右工門と八兵への会話で零落した地主の話をしている

場面である。地主の父親は伊勢から出て一代で富を築いた人

物であるが、勘定高いと評している。両者は階層不明とされ

る。34はひょうきん者のおゑごが、知り合いの女性に自分が

夫と違い、よく食べると話す場面である。両者とも下層とさ

れる。35は地の文の用例で、お盆に閻魔様へお参りに行く女

の子たちの様子を描いた場面である。

・錢百は をあし一すじと(養)

36●夫につけては元結油も匱末に遣ひますから、孔方の遣ひ

が荒うございます(●↓▲)

三編卷之上

37べか

聴な。どう思つたか歳暮に足袋一足。年玉に孔方を

二百呉れたがの。おほかた氣でも違たらうよ。其代

に元日しまから小言だ。(べか↓さる)

三編卷之上

38直 その錢も番頭さんの手から出であるス(直兵衛↓番頭)

四編卷之上

39古 イエサ、何なりとも四季に絶ず、扱又、孔方さへ出せば一切用を足す所ゆゑ、お江戸に産れた衆は（略）（古左工門↓肝右工門）

四編卷之下

36は14と同じ人物の会話、37は12、28、29と同じ人物の会話、38は直兵衛という男性が番頭に話しかける場面、39も古左工門と肝右工門という男性の会話とされる。肝右工門は下層直兵衛、古左工門については不明である。

以上、『婦人養草』の「和言」が、おむす、おさめ、お初の場面の八語の他、十四語（餅を「かちん」「あも」の二語と考える）見られることを確認した。これらの用例の中には男性や下層の女性の用例も多く、既に庶民に日常的に使用されるようになった語もあるのではないかと思われる。この点はまとめのところで検討する。

五 『婦人養草』に見られない大和詞

『浮世風呂』には『婦人養草』に掲出されていない大和詞の使用も見られる。これらの大和詞に関しては『日葡辞書』（二六〇三―一六〇四）と対応させ、用例を記述する。松井（二〇一四）「第三第二章 『日葡辞書』の女性語」では『日葡辞書』に収録された女性語が「武家作法の規範的な使い方

に重点を置く礼法家、あるいは武家礼法に詳しい人の指導のもとに、またその礼法家たちの伝書の類によって掲出された」としている。そこで、『日葡辞書』の女性語を『婦人養草』の〈和言〉と同系統の武家礼法によって定められた女性語（女中ことば）と考え、『浮世風呂』の大和詞と対応させることにする。

・ Yonaca. ヲナカ（御中） 腹。例 Yonacaga varui.

39かみがた お山さん。ゑらう寒いな。何じやと、トトモウ此間はお腹の耦合がわるうて、夜ざり毎に腹痛でづ、ないはいな。（かみがた↓山）
二編卷之上

40多ご お昼はチツト早かつたから、未だ腹が能かと思つて、食て見たら、又いける。（多ご↓▲）
三編卷之下

※▲はひょうきんな女房おゑごと話す女性。七つばかりの女の子と一緒に湯へ来ている。

41福 これはしたりどうしたものだ。兎角手拭のお湯を吸てならぬ。およし〜〜。お腹が瀉ての、腹が痛くなるよ。（福↓子供）

四編卷之下

である。43は14、36と同じ人物である。⁽⁸⁾

39は27と同じ上方筋の女性の言葉、40は34と同じ女性、41は上層町人の福助が、手ぬぐいのお湯を吸う子供におなか痛くなると注意している場面である。福助の言葉の中には「腹」という幼児語も見られる。

・Vofye. ヲロエ (お冷え) 麻で作った日本の着物。

42しつ そうさ。此間布子の裏をの、布布に解て見たらの、手をあてる所がビリくさ。タツタ一冬はつちやア着ねへものが、あれじやアたまらねへ。しかも去年みつ物で買ったのさ。(しつ↓かさ)

二編卷之下

前編卷之上

43 ● イエモウ、ほんに慌た物でございますよ。着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば、さばくとした布子も着られますのに、穢たらその俣に葛籠の隅へおし込で置ますし、兎角針さへ持ば昼も居眠ますが、ホンニくくく仕様仕方のない物でございす (●↓▲)

三編卷之上

42はしつとかさが小間物屋の裂の質が悪いと話している場面

・Vocazu. ヲカズ (お数) Sai (菜) に同じ。料理に同じ。

これは婦人語である。 ▼Vomauri

44松 土大根の折を買て来て、ソレ、きのふの焼たこはだを一匹づゝ入れて、輪切大根の煮付、夫が惣菜。大勢下女はしたがあつても、菜は婆さまが出てまんべんなく盛わたす。

(中略)

夜食は澤菴、それも塩のあた辛いやつだから、二切で湯までの菜になる。けふは佛の日だといふ所が、八盃豆腐が、平の中をゆるくと游で居るやつさ。(松右工門↓八兵へ)

45辰 チヨツ、やかましい。そんならお弁当にしてやるから、お菜好はならないよ (辰↓馬)

(中略)

46巳 ハ、、、。いへ又、雨降風間には、轉んだり何角致さぬで、お弁当も能ございすが、お菜がなんだは角だはと、望み好がうるさうございすよ。(巳↓辰)

二編卷之上

44は33と同じ人物同士の会話、45、46は辰、巳という上層町人の妻同士が子供のお弁当の事を話す場面である。⁽⁹⁾

・ Mimochi. ミモチ (身持) 妊娠. Cano Yonna mimochini

nata, Imimochide gozaru. (かの女身持になつた、または、身持で御座る) あの女は妊娠している。婦人語

47ゆず へ、へ、へ、目を塞で居ても心は寐ませぬから、ヤハリ寐る時は寐ますのさ。懐胎の女の腹が大きいとて、食を食はずには居らぬ道理でござる (ゆず↓生

醉)

前編卷之下

47は座頭のゆずのいちが生酔にかかわれる場面である。生酔は武士と思われる。このためゆずのいちの言葉遣いは丁寧である。

・ Fucuro フクロ (袋) 母. Volucuro (お袋) の形で、婦

人の間で用いられるのが普通であるけれども、またそれ以外の人々の間でも用いられる。

※原文と少しく離れている。おふくろ

48ぶた七 おたア (おらが) おふくど (おふくろは) 、おでへ (おれを) おでへ可愛がる。

(中略)

ナニく、おふくどく、お袋合点しねへ。(豚七↓▲)

前編卷之上

49源

太吉めエ、お袋に天井見せられたナ。くやしきは石垣へあたまをぶつ付けて死んででもしまふが能。(源↓太吉)

前編卷之下

50●

お袋さん、お早う入らつしやいましたね (●↓▲)

三編卷之上

51甘次

そこで孟子のお袋さまは、三たび轉居をさしつたとある。成程御尤なことさネ (甘次↓むだ助)

四編卷之上

52お俳助

おまへさんでもハヤ、お盆の御客さまで、さぞおとり込さまでござりませう。ハイく。お袋さまやお内さまが、ハヤく、お大体さまではござりませぬ。(お俳助↓闇雲屋の吉兵衛)

四編卷之下

お袋に関しては『日葡辞書』では女性語と限定はしていないが、「婦人の中で用いられるのが普通である」という記述から用例を記した。48、49、51、52の5例中4例が男性の言葉であり、男性の使用の方が目立つ。48は中風を患う豚七の言葉、49は若い男性の源と太吉が将棋を打っている場面、51は子供たちの盆踊りの様子を男湯の格子越しに見ていた甘次の言葉、52は言葉遣いの丁寧なお俳助というあだ名の男の言葉である。豚七、源、太吉、甘次に関しては特に階層が示されていない。甘次の話し相手むだ助は下層とされる。お俳助は上層に準ずる階層と捉えられている。50は14、36、43と同じ人物の会話である。

• Maneeyakani マメヤカニ(まめやかに) 念を入れて注

意深く、一般に婦人の用いる語。

53 晩右門 心を信にするが信心。わしが早い譬論を云つて聴

せよう。隠居が又はじまつたとおもふだらうが、身の薬だから聴なさい(晩右門↓とび)

53は隠居の晩右門が若い衆を諭している場面である。階層は不明とされる。

• Xixiシシ(し) 子ぶもの小便 婦人語 Xixiu suru.

54 ▲ サア、おめ此頃は立居もひとり出来ねへから、尿管

もおまるでとる。イヤハヤ、粉になるよ(▲↓●)

二編巻之下

※此ばアさまはノヤ／＼といふことばくせありてなきことばかりいふがかなり

●おがむやうな手つきをしてゆびのさきをあらふか

みさま

54はばあさまが近所のかみさんに病気の亭主を介護している様子を語る場面である。どちらも中層あたりとされる。

• Ido イド(居処) 人の今居る所 例, Idoon tatsu. (居

処を立つ) 今居る所を立ち去る. Voids. (御居処)

尻や臀部の意味で、婦人が人に敬意をこめて話すときに用いる語。

55 多ご △ボンラドリノウタ「前駈衆は尻が低い。最う些高

くたアのウミイマアすウ引

三編巻之下

55は34、40と同じ女性の用例で、盆踊りの歌の中に用例である。

• Meximono. メシモノ(召物) 貴人の着物、または、履物。

これは、一般には婦人語である。

56よめ ア、弥壽やすが跡あとから雪ゆきで来るから能よよ。モシエ、お風かぜ

でもめしてはお悪わるうございますから、直すぐにお着物めしものを
めさせ申まうしませうネ（よめ↓姑）

二編巻之下

57はね 違ちがつたもんだの。チトお衣装めしものを拜見はいけんいたしたいネ

（はね↓ねこ）

三編巻之上

56は15と同じ人物で、武家屋敷でのお仕えを終え、上層町人に嫁した女性の言葉、57は町芸者とおぼしきはねとねこの会話である。

以上、『日葡辞書』との比較で、九例の大和詞を取り上げたが、この中の「お腹（おなか）」や「お菜（おかず）」「お袋（ふくろ）」には男性の使用も見られる。特に「お袋」は男性の使用が多く、現代では男性が使用する語というイメージが強い。

この他『浮世風呂』には、『婦人養草』『日葡辞書』に掲出されていない「つむり」の使用も見られる。「つむり」は、元禄五年の写本『女中詞』、また元禄五年本より古い形態を残すとされる安永五年の写本『女言葉』（いずれも松井（二〇一四）という伝書系女中ことば集）に掲出されている。¹⁰⁾

・おつむり 頭ヲ云（『女中詞』）

・つむり 頭あたまの事（『女言葉』）

58巳 ああの島田しまだくづしの形かたちなどは役者やくしゃの鬢かづらどぜん同然どうぜんさ。頸つねりへ乗のせ

さへすれば手てつかずに鬢まげが出来る。イヤハヤ、利口りこうな
事ことさネ（巳↓辰）

（中略）

59辰 一類ひつじょうりは頸うえの上うへへ鬢まげがおつかぶさつて居ゐましたが、又またむ

かしへ皈かへつて、些ちいばかり貰もらて来たきほどの島田しまだになりました（辰↓巳）

二編巻之上

60子こもり そそつちの肝積かんせきは三年もこてへるは。お嬢じやうさん、お

嬢じやうさん。ぢつとしてお出いででないよ。つむりをかぶ
りくしてお動いごき。そうするとおまへさんのおつ
むりおもを思おもふさま痛いた々々にして、御浮母おほが大おほしくじり
だ（子こもり↓お嬢じやうさん）

二編巻之下

61丸 ヲヤ、ほんにねへ。若いわか作りつくだね。あのアレ、ぐるり

落おとしに結居いるおかみさんの頸つねりを御覽ごらんか（丸↓角）

三編巻之上

62 作 馬鹿ア云や。そんな下直なお頭ぢやアねへ（作↓とび）

四編卷之上

63 点 イエサ、お頭をお洗なさる所を見うけましては、私共

もどうやら洗たう成ます。ハ、、、（点兵衛↓鬼角）

四編卷之上

58、59は45、46と同じ人物、60は同じ家の男の子の世話をする子もりと女の子の世話をする乳母が喧嘩をしている場面、61は十歳ぐらいの女の子丸と角の会話で角は上層町人の娘、丸はそれより低いようである。62は鉄砲作ととび八の会話で両方とも下層とされる。63は俳諧師鬼角と商人体の点兵衛の会話で鬼角は教養層、点兵衛は商人体であるが、どの階層かは不明とされる。62、63とも男性の用例である。

六 『浮世風呂』に見る大和詞

三馬の著作に記述が見られる『婦人養草』に掲出された「和言」は、『浮世風呂』の中で、二十二語の使用が見られる。他に『浮世風呂』に見る「大和詞」は『日葡辞書』の調査で九例、元禄五年本『女中言葉』、安永五年本『女言葉』に「つむり」の用例があり、合わせて三十二語であった。この他三馬の著作の中では、注2に示した『四十八癖』三編「近所

合壁の奴婢を会めて世間話を好く人の癖」に、「うぐいす（せつかい）、「こがらし」（連木）、「いし／＼」（団子）、「すもじ」（鮓）等の大和詞が見られる。このうち「こがらし」は、今回取り上げた『婦人養草』『日葡辞書』『女中詞』『女言葉』には見られない。屋敷奉公から戻ってきたお冬に対し、女性が大和詞をまねて話をしている場面である。

こがらしはこつちらのおくもじへ掛けておくれ、エ、おくもじとは荃漬の事だと。ヲヤ鮓はすもじといふから、生妻はしよがもじ、釘は大かたおくもじだらうと思つた。あだ名のねへ物へは、やつたらむしやうにおの字を付けてもじもじとさへ云へば、能いかと思つた。

三一〇頁

右の引用に見られるように、もじ言葉を間違えた場面は『浮世風呂』のおむすどと似通っており、大和詞を笑いの種とした趣向を取り入れたのであろう。

さて、『婦人養草』『日葡辞書』等を参考に『浮世風呂』から三十二語の大和詞を抽出したが、三馬はこの中でどの語を大和詞と捉えていたのだろうか。『浮世風呂』では、大和詞を使う人物は上層から下層の町人、さらに男性の使用もあり、このすべてが大和詞としての使用とはいえない。「茄子（なす）」や「孔方（おあし）」「菜（おかず）」「お袋（ふくら）」等、男性の用例が見られる語の中には、既に一般語化しているも

のものではないかと考えられる。先にあげた『四十八癖』の同場面には、「孔方（おあし）」「菜（おかず）」の語が見られるが、これらは特に大和詞と意識して使用されてはいない。⁽¹²⁾「お袋」に関しては男性の使用の方が多く、この時代には現代に通じる使用が既に確立していたと言えるのではないだろうか。

また、おたこや福助の使用する「餅（あんも）」は幼児語とも考えられるし、ゆずのいちの使用は生酔（武士）に対する言葉遣いなので、丁寧な語であることはいえるが、大和詞の使用かどうかは定かではない。53の晩右工門の「まめやかに」は中古から見られる副詞で、特に大和詞と意識した使用ではないと思われる。三馬の時代には、どの程度大和詞が一般語化していたのか。今後同時代の他の著作からも大和詞を採取し、検証していく必要があるだろう。

七 三馬の大和詞に対する知識

最後に本稿の主題である三馬が大和詞の知識をどこから得たのかということについて考えてみたい。

『浮世風呂』には、小笠原流の諸礼書に関する記述が見られる。

松 あの御親父は伊勢から出て来て一代に仕上た人さ。其

代利勘だ。なんでも人は奢てはゆかぬネ。けふは大分魚が見えるから、チト驕つて奉公人に食はせようといふ所が、大おほきな皿さつらに鯉こい（ひしこ）の酢煎すいりな五匹ひきばかり、尾頭おしらをならべて、鯉こい（ひしこ）が小笠原流で、トしやかにかまへて居るはさ。（松右工門↓八兵へ）

前篇卷之上

お川 ヘン、穴嫁あなよめがあきれるよ。ヤレ、香かをかぐの茶ちやを食くらふのと、大笠原おほがさはらか采女うねめがはら原かのお諸礼しよれいを仕しら休やす込こ、風見かみの鳥からすを見るやうに高くとまつてすまアして居るも小癩こじくに障さらア（お川↓お山）

三編卷之下

松右工門と八兵へ、お山とお川の会話には小笠原流や諸礼書という言葉が使用されており、三馬が小笠原流の諸礼書を読んでいた可能性が考えられる。諸礼書の中には女訓書が含まれるものもある。松井（二〇二四）では、享保七年の奥書がある『女言葉』（狩野文庫蔵）が、八冊の写本が合綴された『諸礼叢』という書の一つであることを示している。

拙稿（二〇一五）⁽¹³⁾では、国会図書館所蔵の三馬の蔵書（三馬蔵書印書）を調査し報告を行っている。本調査の中では、三馬蔵書印書には諸礼書や女訓書の類は見られなかったが、国会図書館の他、三馬蔵書印書は多機関に渡って所蔵されている

るので、今後これらの三馬蔵書印書の調査を進め、女訓書と三馬の大和詞との関係を探っていきたい。

八 おわりに

以上、本稿では、三馬の『浮世風呂』に見る大和詞の描写が女訓書の影響を受けている可能性を推測した。三馬が女訓書を読んでいたことはほぼ確実と言えよう。また、その中に収載された「女中ことば集」（松井〈二〇一四〉での名称）に見る大和詞を参考にした可能性は高い。三馬が『浮世風呂』の中で「大和詞」という語を使用した理由も、『婦人養草』の「和言」等の女訓書⁽¹⁾に記された語を利用したのではないかと考えられる。但し、三馬が著作に女訓書の大和詞を利用したことは、三馬の著作の大和詞すべてが虚構であることを示すものではない。当時の文芸に見られる大和詞の描写が、どの程度正確であり、どの程度真実が潜んでいるかを見抜くのは容易ではないだろう。しかし三馬の著作の特長は、市井の言葉を精緻に描写するところであり、江戸の人々の言葉遣いを細やかに観察する三馬の眼があったからこそ、その描写が生き生きと読者に伝わるのである。故に、三馬の大和詞の描写には、実際の使用を観察した場合もあつたのではないかと筆者は考える。今後三馬の著作に見る大和詞に関しては、

三馬が何を大和詞と考えていたかを含め、さらに検証を進めたい。

注

(教授 日本語学)

(1) 本稿での「大和詞」の意味は松井利彦(二〇一四)「女中ことば集の研究—女性語の制度化と展開—」の中で使用する「女中ことば」と同意である。松井は

「女中ことば」は近世の武家社会において女性の礼法として定められた女性語であり、後に町人層などの女性にも広まる女性語である。

とする。本稿では『浮世風呂』で使用されている「大和詞」の名称を生かし、「女中ことば」の意味でこれを使用する。尚、松井の論文の引用や説明をする場合は「女中ことば」を使用することもある。

(2) これは、『四十八癖』(文化十三・一八一六)の三編「近所合壁の奴婢を会めて世間話を好く人の癖」の中で、「おてんば娘おしやべりあまの功を経たるか、ア左衛門」と描写された女性のセリフである。お屋敷奉公をしていたお冬の真似をし、次のように大和詞が使用されている(新潮日本古典集成『浮世床 四十八癖』から抜粋)。

ワイ／＼お冬どん、そのうぐいすは布巾掛の傍、おしやもじは鍋棚へ上げて、こがらしはこつちらのおくもじへ掛けておくれ、エ、おくもじとは茎漬の事だと。ヲヤ鮓はすもじといふから、生姜はしよがもじ、釘は大かたおくもじだらうと思つた。あだ名のねへ物へは、やつたらむしやうにおの字を付

- けてもじもとさへ云へば、能いかと思つた。団子がいし
 〔だの、せつかいがこがらしだの、山荒だのと、部屋方奉
 公も仇名を覚えるが面倒だのう。(中略) お冬ども最う半
 年過ぎると、すつぱりと町にならうが、口癖になつたからな
 ほらねへ
 三二〇頁
- この中で、二重傍線で示した部分は誤り。「こがらし」は「連木」
 の事である
- (3) 『浮世風呂』の挿図の脇には「此笄之の圖は貞享四年印本女用
 訓蒙図彙けんもうずいにあり 今文化七年百二十四年に及ぶ」という記述が
 みられる。『家政学文献集成 續編 江戸期Ⅷ』(一九七二)の
 「女用訓蒙図彙」(三四頁)には、挿図の元とおぼしき笄の図が
 見られる。
- (4) 松井(二〇一四)「第一章 伝書系女中ことば集の編者」の補
 注9に「著者の梅塙散人の本名は村上武右衛門で、「加賀藩士
 にして三百石を受け、元禄四年に没した人」と日置謙『加能郷
 土辞彙』(昭和一七年二月、金沢文化協会刊)の『婦人養草』
 の項にある(六三頁)」と記されている。
- (5) 松井(二〇一四)によると、この『婦人養草』に見る「和言」は、
 元禄五年写本『女中詞』(国会図書館所蔵)等と同系統の写本で、
 貞享三年以前に書写された伝書系女房ことば集の影響を受けた
 ものとされる。
- (6) 小松(一九八七、一九九九)「浮世風呂における女性の人称と階
 層」「浮世風呂における人称の階層里男女差」では、人称代名
 詞から登場人物の階層を判断している。
- (7) 現在のところ『日葡辞書』の時代までさかのぼった伝書系女中
 ことば集はまだ発見されていない。伝書系女中ことば集で最も
 写本年代が古いのは、松井(二〇一四)に収録されている元禄
- 五年の『女中詞』(国会図書館所蔵)である。尚、同書には安
 永五年の写本『女言葉』(姫路文学館所蔵)も収録されているが、
 この女中ことば集はその内容や奥書の調査から、元禄五年本よ
 り古い形態を残すと考えられている。
- (8) 日本古典文学大系の頭注には「夜着。どてら。」(42の頭注)、
 「ぬのこ」「よぎ」の女房言葉「北の物」ともいう」(43の頭注)
 とある。
- (9) 松井(二〇一四)では「おかず」は近世の武家における女中
 ことばであった可能性が充分にあり、そうであるからこそ武家
 礼法家によつて女中ことば集にまず記されたのである(五二
 頁)と述べている。
- (10) 松井(二〇一四)では姫路文学館所蔵、安永五年写本の『女言
 葉』を取り上げ、これが『女中詞』より古い形態を有する伝書
 系女中ことば集であることを示唆している。
- (11) 「こがらし」は『女重宝記』(元禄五年刊)には見られる。
- (12) 『四十八癖』の「菜(おかず)」「孔方(おあし)」の用例は次の
 ようである(新潮日本古典集成『浮世床 四十八癖』から抜粋)。
 ・おいらもお菜は何れにせうか、製へるも否だから角の
 居酒屋へ平を持つて、湯豆腐を八文ですまそう。
 三二一頁
- ・ヲヤ岡持の中に孔方が四百銅不足あるよ。
 三二三頁
- (13) 挑戦的萌芽研究(課題番号二五五八〇九九)「式亭三馬の言
 語描写における三馬蔵書の影響」(二〇一三年四月一日)
 二〇一六年三月三十一日予定)に関連する調査。
- (14) 『婦人養草』に見る「和言」は『女万宝操鑑』(寛政一三
 一八〇二)の中にも見られる。その他、『女重宝記』(元禄五

（二六九二）の中にも「大和詞」の名称がある。三馬はこれらの女訓書に見る名称を『浮世風呂』の中に利用したのではないかと考える。

参考文献

- 氏家幹人（一九八五）『日常性の中の武士文化』網野善彦編『日本民俗文化大系11都市と田舎』小学館
- 小松寿雄（一九八七）『浮世風呂における女性の人称と階層』『近代語研究』七集 武蔵野書院
- 小松寿雄（一九九九）『浮世風呂における人称の階層差と男女差』『近代語研究』十集 武蔵野書院
- 田中ちたこ・田中初夫編（一九七二）『家政学文献集成 續編 江戸期Ⅳ』渡辺書店
- 松井利彦（二〇一四）『女中ことば集の研究―女性語の制度化と展開―』武蔵野書院
- 長崎靖子（二〇一五）『式亭三馬の蔵書―国会図書館所蔵三馬蔵書印書を中心に―』『川村学園女子大学大学院研究年報』第4号

調査資料

- 『婦人養草』
- 『江戸時代女性文庫50』（天野晴子編（一九九六）収録） 大空社
- 『家政学文献集成 續編 江戸期Ⅳ』（田中ちたこ・田中初夫編（一九七二）収録） 渡辺書店
- 『女房言葉の研究 続編』（国田百合子（一九七七）収録） 風間書房
- 『女用訓蒙図彙』

『家政学文献集成 續編 江戸期Ⅷ』（田中ちたこ・田中初夫編（一九七二）収録） 渡辺書店

『日葡辞書』
『邦訳日葡辞書』（土井忠生・森田武・長南実編（一九八〇）） 岩波書店

〔女中詞〕

『女中ことば集の研究―女性語の制度化と展開―』（松井利彦（二〇一四）収録） 武蔵野書院

〔女言葉〕

『女中ことば集の研究―女性語の制度化と展開―』（松井利彦（二〇一四）収録） 武蔵野書院

附記

本稿は科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究 課題番号二五八〇九九）『式亭三馬の言語描写における三馬蔵書の影響』（二〇一三年四月一日～二〇一六年三月三十一日予定）の研究成果の一部である。